

ピューリタニズムに関する一考察

山根 邦雄*

A Study on Puritanism

Kunio YAMANE*

I はじめに

ピューリタニズムがアメリカ文化に及ぼした影響は測り知れないものがある。道徳、宗教、ビジネスの精神、政治団体、教育、文学などアメリカ文化の多くの分野は、ピューリタニズム(Puritanism)に触れずして論じことはできない。しかし、今日ピューリタニズム独自の遺産を明確に識別することはむずかしい。何故ならアメリカ文化は多様な要素で形成されてきたからである。それにもかかわらず、アメリカ人はピューリタンの伝統を強く意識し、それにさまざまに反応してきた。

アメリカの歴史はピューリタン一派に属するピリグリム・ファーザー(Pilgrim Fathers)から始まるといわれている。彼等はどのような歴史的背景の中で、またどのような動機でイギリスからアメリカにやって来たのであろうか。また、ピューリタンの代表的植民地であるプリマス植民地と、マサチューセッツ湾植民地はどのように形成され、それらはアメリカ歴史の中でどのような役割を果たし、その歴史的実験は現在ではどのような評価を受けているのであろうか。その流れを考察したい。

II イギリスのピューリタニズム

イギリスのピューリタニズムはもちろんマルティン・ルター(Martin Luther, 1483-1546)、ジョン・カルヴィン(John Calvin, 1509-1564)の宗教改革により触発されたものである。特にイギリスにおいてはカルヴィンの影響を受けた学者、宗教関係者のアングリカンに対する批判として始まった一種のキリスト教原理運動である。教会が国家権力と一体になりキリスト教の解釈ならびに儀式のやり方を独占することを厳しく批判することから始まった。1517年ルターの宗教改革から17年後、ヘンリー(Henry) 8世は自分の離婚問題を解決するために1534年ヴァチカンからアングリカンを独立させることにした。したがってアングリカンは、プロテスタントではあるが、カトリックの教会の運営とキリスト教に関する解釈をそのまま受け継いでいる。アングリカンの教会の中身は、すなわち教会の組織、運営はきわめてカトリック的である。国王の教会を利用して人民を統治しようとする意図はまったく変わっていなかった。したがって宗教改革の運動の高まりのために教会の保守性が批判的になったのもきわめて当然であった。その批判は英国の近代化の動きとあいまって西欧世界に大きなうねりを形成することになった。イギリスの宗教の変革を求める運動は、エリザベス1世時代から始まり、1649年の王制転覆に続きクロ

* 本学教授

ムウエル (Oliver Cromwell, 1599-1658) の清教徒共和国成立で頂点に達した。その後ピューリタン革命の行き過ぎもあってイギリスは再び王制に戻ることになる。この時点で一時的にせよピューリタンの目的が達成されたのである。17世紀の中葉に何故これが可能になったのであろうか。その運動のうねりはどのように形成されたのであろうか。その中で重要な役割を果たした人々を二、三取り上げ、彼等のアングリカンにたいする批判について概観したい。

1517年にルターが宗教改革運動を起こして以来しばらく時が経過していたが、ケンブリッジ大学の若い神学者の中にカートライト (Thomas Cartwright, 1535-1603) がいた。彼はアングリカンの中にあるカトリック的遺風を鋭く批判した。彼は、アングリカンが持つ古い体質のみならず、加えてエリザベス1世がカンタベリー大主教にたして国民的礼拝様式の統一を命令したことを批判した。女王が聖職者にカトリック的な祭服着用を強制したことも批判のまどになった。その運動の先頭にたったのがケンブリッジ大学で教鞭をとっていたカートライトであった。当然のことながら彼には多くの若い学生が従うことになった。彼の影響でケンブリッジのトリニティカレッジはピューリタニズムの牙城となり、公然と国家権力に反旗を翻した。これは国王にとりきわめて憂慮すべき事態であった。一方カートライトはケンブリッジの神学教授の座につき大学内での地位を確立することになったが、結局はかつての同僚ウィットギフト (John Whitgift, 1530-1604) から告発され、大学から追放された。カートライトは大学から追放後ヨーロッパ各地を旅した後イギリスに帰国し、プレスビターリアンの地下運動にかかわり逮捕され、皮肉なことにかつての同僚でカンタベリー大主教となったウィットギフトから尋問

されることになった。アングリカニズムは体制の思想である一方ピューリタニズムは反体制の思想である。それ故にピューリタンは弾圧されたのである。

アングリカニズムは、カトリシズムの持つ普遍主義に対して、ナショナリズムと結びついていた。換言するなら、イギリスの土着性と結びついたキリスト教である。従ってアングリカニズムは、ナショナリズム、国王絶対主義、受動的服従の倫理の3つの特色を持っていた。少なくとも初期の段階のピューリタニズムはインテリとか大学人、一部の商人の運動であった。ピューリタニズムがエリザベス1世の時代のイギリスに浸透しなかった理由は、当時イギリスはスペインと激しく対決をしており、エリザベス女王を戴き国が丸となり敵にあたらなければならない国際情勢が背景にあった。当時イギリスは、個人の信仰の自由に寛大になれような政治状況におかれていなかった。

ピューリタニズムは17世紀の初頭にあってはエミグレ (émigré) の思想、すなわち外来の思想であり、イギリス本来の土着の思想には馴染まなかった。人間は定定的でなく、旅にでる。これは、バニヤン (John Bunyan, 1628-88) の「天路歷程 (The Pilgrim's Progress) の中に出てくる考えである。カートライトは地位とか名誉を捨ててまさしく旅に出たのである。

アングリカニズムは、イギリスにおける宗教改革を求める嵐のあと定住化に向かうのである。アングリカニズムをてこに国内の強化をはかろうとしたエリザベス1世の支配のもとでピューリタンはどのように反応したのであろうか。彼らには3つの選択肢があった。第一は、地下運動であり、第二はエミグレとなり国外に出ることとであり、第三は、革命である。第一の地下運動は、アングリカンのメンバーの中に

プレスビターリアン(長老派教会)をつくっていく方法である。カートライトはこの指導者になった。しかし、これのために厳しい弾圧を受けることになった。1593年の反ピューリタン勅令によりピューリタンの運動は息の根を止められてしまった。第二の国外脱出であるが、国内での改革が絶望的であると感じられられた時彼等はエミグレになり国外に脱出したのである。その劇的な例がメイフラワー号(Mayflower)によるピリグリム・ファーザーの国外への脱出である。その後も1630年にピューリタンのマサチューセッツへの大移住が起こっている。第3の方法は革命である。エリザベス朝時代には不可能であった革命が、彼女の死後40年してクロムウエルのピューリタン革命で実現したのである。ここにカートライトの理想が短時間の間であったが実現することになった。

1603年にエリザベス女王が死んだ。彼女には子供がなかったのでスコットランドのステュアート家からプレスビターリアンのもとで育てられたジェームス(James) 1世がイギリスの王位を継承することになった。これを機会にピューリタンに希望が湧いてきたのである。1603年彼がイングランドに向かう途中でピューリタンから「千人請願」(Millenary Petition)を受け取ることになるのである。この請願にはピューリタンの主張(教会での礼拝様式、聖職者問題、教会規律などについて矯正されるべき点)が要約されていた。新国王はこの請願を受けて1604年のハンプトン・コート会談(Hampton Court Conference)でアングリカン側とピューリタン側のそれぞれの言い分を聴くことになった。両派の王にたいする働きかけは激しいものがあった。結局国王はピューリタンの請願を却下し、ピューリタンは再び挫折を味わった。しかし、この運動に関与したケンブリジの指導者のなか

ら新世界で活躍する指導者が輩出した。New Englandの指導者になったマサチューセッツ湾植民地の指導的牧師ジョン・コットン(John Cotton)、コネチカットを創設したトーマス・フーカー(Thomas Hooker)、ハーヴァード大学を創立したジョン・ハーヴァード(John Harvard)などである。

Ⅲ プリマス植民地(Plymouth Colony)の建設

ピリグリム・ファーザーと呼ばれるグループはイギリス中部ノテッングラムシャイヤにあるのスクルービ(Scrooby)という小さい村の信者たちであった。1608年春アングリカンの弾圧のために信仰の自由を求めてオランダへ脱出した。ピリグリムの新世界への脱出はそれから約10年後のことであった。その中核になったのはこのスクルービの信者たちであった。このグループの指導者の牧師、ジョン・ロビンソン(John Robinson)はケンブリッジで教えを受けた人であった。ロビンソンは1575年に生まれ、1592年にケンブリッジでパーキンス(William Perkins)の説教を聴き熱心なピューリタンになったが、ハンプトンコート会談後のピューリタンの弾圧でアングリカンから追放された。ロビンソンはスクルービのピューリタンに迎えられた。スクルービの集まりには中心的人物がいた。それはスクルービの郵便便局長のウィリアム・ブルースター(William Brewster)と彼の友人のウィリアム・ブッラドフォード(William Bradford)であった。この二人はメイフラワー号で新世界に行くのである。個人的脱出と違い集団的脱出は困難である。明確な自覚と強固な団結がないと成功しない。人々を団結させたのはピューリタンの信仰だった。しかし、この集会にも弾圧の手が伸びた。そこで人々は故郷を捨て、信仰の自由を求めてオランダへと脱出し

た。当時オランダはプロテスタンニズムに基づく信仰の自由を保障する政策を取っていた。オランダは当時ヨーロッパ各地の信仰の自由を求める人々には恰好の避難地となっていた。ピリグリムたちは約1年間アムステルダムに住んだ後ライデンに移住した。そこで、織物工、大工や石工、鍛冶工などの職業に従事した。しかし、彼等はオランダに永住すると子供たちがイギリス人としてのアイデンティティを失うのでないかと心配して集団でニューイングランドへの移住を企てることになった。

まずブルースター、ブラドフォードのような主として壮健な人々が先に行くことになった。牧師のロビンソンは残留し、5年後ライデンで1625年に死んだ。しかし、彼の妹は先発隊に参加し、初代プリマス植民地総督のカーヴァー(John Carver)と妻となった。

彼等は準備のために一度イギリスに立ち寄った。このころイギリスではピューリタンに対する政策も幾分緩和されており、彼等は大西洋を横断し新世界に移住する正式な許可をもらうことができた。彼等はメイフラワー号、スピーウェドウェル号の2隻に分かれて渡航するはずであったが、スピードウェル号が途中故障したためにメイフラワー号一隻での出発となった。1620年9月にイギリスのサザンプトン(Southampton)港から出航し、11月上旬にプリマス(Plymouth)湾に到着したが、適当な上陸地点が見つからず上陸までに1ヶ月を要した。

同乗者は104名で、全部がピューリタンではなかった。ピューリタンはセイントsaintsと呼ばれ、は男子17、女子10名、子供14名計41名であった。それ以外の人はstrangersと呼ばれた。その中でスクルーピ出身者は最初の脱出から10年あまり経過していたこともあり、ごく小数であったが、この集団の中核となったブルス

ター、ブラドフォードらはスクルーピーのコングリレリゲーションが持っていたの信仰を守り続けた人々であった。

彼等の指導者ウィリアム・ブルースターは出発前にサー・エドワーズ・サンズに関係をつけ北ヴァージニアおける「特殊開拓地」特許状を入手し、ハドソン川の河口近くに行き、そこに交易植民地と漁業基地を建設するつもりであった。彼等は、精神的には強靱な人々であったが貧しかったので、渡航費用、準備のためのお金をロンドンの高利貸しのグループから借りなければならなかった。実際のところピリグリムたちは7年間借金返済のためまるで奴隷のように働いた。

メイフラワー号の船上でブルースター(Brewster)、ブラドフォード(Bradford)、ウィンスロー(Winslow)、スタンディッシュ(Standish)などの有力な指導者は「メイフラワー契約」*¹を書き、それに署名をした。これに41名の成年男子*²が署名をした。これにより彼等は政治団体を結成し、彼等が設立する政府の定める「正当で、公平な法律」に「当然の服従と忠順」を誓った。この契約はヴァージニアの植民地の場合と同様に当時のイギリス人が驚くほどの自治能力を持っていたことと法の支配の下に生活をしようとする決意をしたことを示しているのである。

ピリグリムたちはケープコッド(Cape Cod)を調査した結果、生活に適したところでないと考え、対岸のプリマスに12月16日に到着した。ピリグリムたちが上陸し、粗末な小屋を建て、住むようになると病気が次々と襲い102人の移民うち、厳しい冬を生き残ったのはわずか50名であった。しかし、春が来てメイフラワー号が4月5日にイギリスに向けて出港した時誰ひとりとして乗船するものはいなかった。親切なイ

ンディアンからとうもろこしの栽培を教えてもらい、えびや二枚貝などを獲りどうにか飢えをしのごうができた。秋にはインディアンを招いて感謝祭を祝うこともできた。

ブラッドフォードは第一代の総督が死んだので、第二代の総督に選ばれた。彼は、プリマス植民地が設立されてから10年後に「プリマス植民地の歴史」(History Of Plymouth Plantation)を著した。この植民地では毎年総督とその補佐を選挙で選んだ。またヴァージニアの移民はほとんど死滅したニュースを聞き、彼等は大変緊張しプリマスの港を見下ろす丘に砦を築き、周辺の友好的でないインディアンを警戒した。彼等は、とうもろこしを栽培し、とうもろこしとビーバーの毛皮をインディアンと交換することで、ロンドンの高利貸しに借金を返済することができた。当時ヨーロッパではビーバーハットの人気が高く、この交易でピリグリムは大きな利益上げた。彼等はケープコッド運河とかコネチカットのハートフォードに交易所を設けインディアンと交易をしビーバーの毛皮をロンドンの商人に売り、利益を上げた。

IV マサチューセッツ湾植民地

(Massachusetts Bay Colony)の設立と発展

1629年9月にケンブリッジ大学の卒業生が集まりマサチューセッツ湾会社の管理権と特許が現地に委譲されるなら7ヶ月以内にニューイングランドに移民するという同意書に署名した。そして法律家のジョンウィンスロップ(John Winthrop, 1606-76)を総督に選任した。指導者の中にはボストンの指導的牧師のジョンコットン(John Cotton)もいた。多くの家族が土地と財産を売り払い、1630年の前半6ヶ月のうちに、15隻の船が1,000以上の成人男女と子供をイギリスからマサチューセッツへと運んだ。ロンド

ンの主教がピューリタンに圧迫を加えたのでこの動きが加速された。1634年までに約10,000人がニューイングランドに入植した。これらの人々は明確な使命感を持っていて、彼等の理想を実現できる社会を建設しようとした。彼等にとりニューイングランドは新しい「カナンの地」であった。この移民たちは本国を追われた牧師たちの指導を仰ぎボストン周辺にいくつかの開拓地をつくった。彼等にとり毛皮取引が重要となった。特に盛んであったコネチカット川流域には、ウィリアムピンチョン(William Pyncheon)が新しいスプリングフィールド(Springfield)を建設した。Cornwallの漁業中心地からきたヒュウピーター(Hugh Peter)牧師はマーブルヘッド(Marblehead)に新しい漁業団体組織し、干し鱈の市場を開拓した。干し鱈はこの植民地を支える重要な産業となった。マサチューセッツ湾植民地の他の主要産業は、家畜、とうもろこし、その他の食料品で、これらをお金と家財を持ってやって来る移民に売った。その金で植民者たちは必要な物資をロンドンの商人から購入した。しかし、この方式は、1637年、イギリスの内乱が発端になりピューリタンの移民が中止となったためにピューリタンたちは他に生計の手段を求めなければならなかった。まもなく彼等は西インド諸島との貿易で生計をたてるようになった。ニューイングランドは干し魚、塩漬け牛肉と豚肉、野菜、家禽、馬などを西インド諸島に輸出してその金でイギリスからの必要な物資の購入にあてた。また、その物資を運ぶための船舶にたいする需要が旺盛だったために造船業が起こった。1670年ごろ彼等は西インド諸島の糖蜜を蒸留して、ラム酒をつくり始めた、これがりんご酒と自家製のビールに代わってこの植民地の酒類となった。西インド諸島との貿易はニューイングランドの経済を支

える重要な柱となった。これがなければマサチューセッツ湾植民地の繁栄はなかったであろう。この植民地の特許はロンドンから現地のボストンにうつされたために将来のアメリカ諸制度に大きな影響を与えることになった。植民地は事実上イギリス本土から独立して、王から任命される総督や裁判官も、イギリスの守備隊や派遣された役人も駐在せず、植民地をしばるものは何もなくたつた。特許状に従い、植民地政府がとった形態は、アメリカの政体の原型になった。自由人から構成される総会(議会)が招集され、そこで毎年総督、副総督、補佐役が選出された。マサチューセッツ湾植民地の政治形態はそれから分岐した他の植民地およびそれより古いプリマス植民地でも模倣されることになった。

ニューイングランドに移民した者は大部分中産階級の農民、商人、職人たちで、なかには遺産を残すほど財産を持っていたものもいた。ピューリタンは肉體労働を恥としなかった。いかに貧しくとも教会員であれば投票権があったので自営農民と労働者は、社会の中核を形成することができた。この植民地に入植した人々はピリグリムほど宗教的にラディカルでなく丁度アングリカンと分離派(separatists)ピリグリムの中間に位置していた。ピューリタンという名称は彼等らにはふさわしいものであった。なぜなら、彼等の狙いはアングリカンを“purify”することで、それを否認することではなかった。彼等はアングリカンの腐敗、礼拝儀式が極端に飾り立てられていることを遺憾に思った。また僧職が信仰心の薄い人物に売り渡されたり、カトリックほどでないにせよ、アングリカンの教会がやたらと形式化していることを嘆いた。彼等は、アメリカに渡り教会の清浄さと教会の権威を回復しようと決意をしたのであった。

この植民地の指導者ウィンスロップとはどんな人であったのか。彼は、決して単細胞で、無学で、賛美歌ばかり歌っているような月並みなピューリタンでなかった。彼はケンブリッジ大学を出て法律家として成功をおさめ議会に提出する法案を起草する仕事にもたずさわったことがあった。彼は莊園を所有し召使いや小作人を大勢かかえていた。政治的には保守的であり、生まれながら貴族の人間であったが同時にアングリカンの腐敗を嫌悪し、妥協を許さないピューリタンであった。当時イギリスは繊維不況に見舞われ国全体がひどい不景気に見舞われていた。こういう時期に彼は法律家としての仕事も失い、これら一連の惨禍を目のあたりにみて神を失った王国に神が天罰を加えたと感じた。結果的には彼は祈りと富を愛した。ウィンスロップの鋭敏な事業感覚によりこの植民地は繁栄へとむかったのである。

V ピューリタニズムのアメリカン文化への貢献とその批判

プリマス植民地 ピリグリムの新大陸への移住への動機は経済的というよりは、信仰の自由を求めて自主意思に基づきプリマスに集団でやってきた。これは近代社会形成のうえで重要な意義を持つものである。プリマス植民地は時間的にヴァージニア植民地に若干の遅れをとったがその歴史的意義においては輝かしい足跡を残したと言える。この植民地の形成はアメリカ民主主義の第一歩である。しかし、プリマス植民地の指導者は大学出の指導者もおらず植民地を組織的に運営できる人がいなかった。1667年ブッドフォードの死後は知的にも政治的にも優れた人材を欠き初期の民主的気風も次第に退化していった。そして、ついに1691年マサチューセッツ湾植民地に吸収された。そのためアメリカ

史への影響は、象徴的意味を除いて、きわめて限定的といえる。しかし、そのことは、プリマス植民地建設の意義を否定するものでない。植民地建設は自然の脅威にたいする苦闘にくわえて、ロンドン商人への負債の返済や国王の特許状を持たぬことなど経済的、政治的にも不利な条件で行われた。ブッドフォードにしても聖職者でなく、ただの市民であった。ピリグリムはこういった困難を克服し自分たちの信仰に忠実な礼拝と、それを中心とする生活がアメリカの荒野において可能であることを立証したのである。彼等はまさしく使徒を継承したのである。ピリグリムの試みは万人が使徒であるという宗教改革の精神を体現したものであった。

マサチューセッツ湾植民地 前述のごとく、この植民地に1630年から10年間のうち約2万人が移住してきた。ウインスロップの意図は明白であった。彼等は商業的意図で作られた植民地会社の指導権を握り自分たちの目的達成の手段とした。移民の主力はウインスロップ同様に自作農や職人であった。移民の動機は政治的、経済的、宗教的、家庭的などさまざまな原因が重なりあったものであった。ウインスロップは移民の動機について自ら多くの原因を挙げながら、移住の目的は神の意思にかなう社会を建設することにあると考えた。移住者は実際多様なグループであったが、彼等は圧倒的に中産階級であり、多くの場合宗教的動機が人々を結び付ける役割を果たしていた。この植民地は移住者の宗教的意識と中産層的土地獲得への欲求の上に成り立っていた。この植民地の指導者たちは、住民のかかる意識を神の国建設という方向に導いた。これを可能にしたのが契約による理論であった。彼等にとり、植民地建設は、神との契約の義務を果たすことであった。契約によ

る社会制度の特色は、第一に教会員になるために厳密な資格テストが要求されたことであった。第二に自由民の資格には教会員たることが必要であった。自由民が投票権を持ち、彼等は議会で総督その他の政府の役人を選出する権利を持った。政治に参画できる自由民は教会員であり、自由民は全体の人口の約9分の1を占めるにすぎなかった。彼等はいわば神に選ばれた選民であると考えた。この植民地の体制は一種の神権政治、寡頭政治であった。この植民地の政治形態はちょうど中国共産党による政治とよく似ている。政権を運営する唯一の政党は国家の繁栄のために市場経済を導入しているが党員でない限り政治的発言権は与えられていないのである。生活は市場経済で生き生きしているが、市民の同意で支えられているわけではなかった。上からの厳しい統制で秩序が維持されたのである。支配者は労働や礼拝をはじめ、娯楽、ビジネス、文学から娯楽、道徳にいたるまで社会のあらゆる機能を支配した。この植民地では「旧約聖書」から抜粋された文言と指導者ウインスロップの思想を加味した訓戒により統制はさらに厳格になった。個人の行動を規制する安息法のような法律(blue law)もあった。他人のものを盗んだり、みだらな歌を歌ったり、よばったりすればすぐに牢獄ゆきで、教会の近くで軽口をたたいたりするだけでさらし台にかけられることもあった。姦通は死罪だった。彼等は聖なる町をつくりあげるためにそのようなことをやってきたのである。彼等は自分たちこそ神の御心にかなう生活をするために正しい掟を守っているのだと信じた。その極端な例がセーレムの魔女狩りであり、ホーソンの描いた「緋文字」の世界であった。そのために自分たちの考えと違う人々に苛酷な態度をとることになった。その結果この植民地の掟に従うことが難し

いいと考える人々は宗教的寛容を求めて他の植民地へ移っていった。

VI むすび

腐敗したアングリカンニズムの圧迫から逃れ、ニューイングランドでピューリタンの理想郷を建設せんとする試みは1620年のピリグリムによるプリマス植民地の建設、さらに10年遅れて始まった1630年代の会衆派によるマサチューセッツ湾植民地の建設によりアメリカの民主主義の歴史が始まることになるのである。ピューリタンは新大陸で母国イギリスの政治、社会体制とちがった階級性制度のない自由な社会をつくりはじめるのである。国土の広大さ、また豊かな資源を活用して、徐々ではあったが、経済的にも本国イギリスから独立することも可能になるのである。ピューリタンは高い道徳性を備え、勤勉を愛し、労働いとわず、欲望を抑え、よそ者を排除し、自分たちのコミュニティを形成し、自分たちのユートピアの実現をめざした。

しかし、厳格なピューリタンの統制に従うことは難しいと考えた人々は、マサチューセッツ湾植民地から出て、南のコネチカットとかロングアイランドなどに散っていった。たとえば政教の分離を唱えたロジャーウィリアムズ (Roger Williams, 1603-83) は、信仰の自由を求めてロード・アイランドを建設した。また、ウィリアムペン (William Penn, 1644-1718) により創設されたペンシルベニアにはクエーカーが大量に入植した。また、カトリック教徒が安心して移民できるようにとヴァージニアの北にメリーランドが建設された。このようにヴァージニアとマサチューセッツの間に多くの植民地が建設された。その中心がフィラデルフィアであった。宗教的にもピューリタン以外に多様なグル

ープが移民をしてきて、宗教的に厳格な、暗いイメージのピューリタンの影響は徐々に低下していった。メソジスト、ユニテリアン、カトリック、ドイツからやって来たルーテル派、メノー派といった人々がこの中間地帯に多く移民してきた。また社会の進歩に従い多様な考え方がつぎつぎと勃興した。たとえば、ヨーロッパの啓蒙主義の影響をうけエマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) とか、ソーロー (Henry David Thoreau, 1817-62)、ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) らがアメリカ超越主義 (Transcendentalism) の思想の流れを形成し、神への接近の手段として自己の教養を高め、自然を探求しようとした。彼等は楽天的で自分の中にこそ神が宿ると信じた。これは神を中心に据えたピューリタンのカルヴィニズムと違い、人間中心主義の主張であり、カルヴィニズムの否定につながっていった。こういった考え方は、キリストの神性を否定し、キリストをただの宗教的偉人とみなしたチャンニング (William Ellery Channing, 1780-1842) の影響の下にひろがったユニテリアニズム (Unitarianism) の考え方と合流し、アメリカ人を精神的独立と国民的自覚へと導いていった。

ともあれ、ピューリタニズムは今日のアメリカ文化を形成している中心的考え方、すなわち民主主義、人権思想、宗教の自由、宗教的寛容、社会契約説など近代化の基礎理念を生み出す基になったことは忘れてならない事実である。

参考資料

* 1 メイフラワー契約

In the name of God, Amen. We whose names are underwritten, the loyal subjects of our dread sovereign Lord, King James, by the grace of God, of Great Britain, France and Ireland king,

defender of the faith, etc., having undertaken, for the glory of God, and advancement of the Christian faith, and honor of our king and country, a voyage to plant the first colony in the Northern parts of Virginia, do by these presents solemnly and mutually in the presence of God, and one of another, covenant and combine ourselves together into a civil body politic, for our better ordering and preservation and furtherance of the ends aforesaid; and by virtue hereof to enact, constitute, and frame such just and equal laws, ordinances, acts, constitutions, and offices, from time to time, as shall be thought most meet and convenient for the general good of the colony, unto which we promise all due submission and obedience.

In witness whereof we have hereunder subscribed our names at Cape-Cod the 11 of November, in the year of the reign of our sovereign lord, King James, of England, France, and Ireland the eighteenth, and Scotland the fifty-fourth. Anno Domine 1620.

神の栄光のため、キリスト教の信仰の増進のため、及びわが国王と祖国の名譽のために、ヴァージニア北部地方における最初の植民地を創設せんとして航海を企てたものであるが、ここに本証書により、厳粛且つ相互に契約し、神と各自相互の前で、契約により結合して政治団体を作り、以ってわれわれの共同の秩序と安全を保ち進め、且つ上掲の目的の遂行を図ろうとする。そして今後これに基づき、植民地一般の幸福のために最も適当と認めらるところにより、随時、正義公平な、法律、命令等を発し、憲法を制定し、また公職を組織すべく、われわれはすべてこれらに対し、当然の服従をすべきことを誓約する。(和訳は、大下尚一著「ピューリ

タニズムとアメリカ」P74から抜粋)

* 2 Mayflower Compactに署名した41名の氏名
John Carver, Edward Tilly, Digery Priest,
William Bradford, John Tilly, Thomas
Williams,
Edward Winslow, Francis Cooke, Gilbert
Winslow,
William Brewster, Thomas Rogers, Edmund
Margeson,
Isaac Allerton, Thomas Tinker, Peter Brown,
Miles Standish, John Ridgdale, Richards
Britteridge,
John Alden, Edward Fuller, George Soule,
Samuel Fuller, John Turner, Richard Clarke,
Christopher Martin, Francis Eaton, Richard
Gardiner,
William Mullins, James Chilton, John Allerton,
William White, John Crackstone, Thomas
English,
Richard Warren, John Billington, Edward
Doten,
John Howland, Moses Fletcher, Edward
Leister,
Stephen Hopkins, John Goodman

参考文献

- 1 Alistair Cooke, *Alistair's Cooke's America*, London and Charles E, Tuttle Co. Inc.1973
- 2 Samuel Eliot Morison, *The Oxford History Of The American History*
サミュエルモリソン、アメリカの歴史、集英社、1965
- 3 Ralph Baton Perry, *Puritanism and Democracy*, New York, 1944
- 4 Bernard Bailly, *The New England Merchants in the Seventeenth Century*,

Cambrige, 1955

- 5 アメリカ学会訳編、原点アメリカ史 7巻、岩波書店、1950-82
- 6 大下尚一編、ピューリタニズムとアメリカ、南雲堂、1972
- 7 中屋健一編、新大陸と太平洋（世界の歴史11）、中央公論、1961
- 8 猿谷要著、アメリカ歴史の旅、朝日選書、1987
- 9 大木英夫著、ピューリタン近代化の構造中公新書、1997
- 10 Leon Howard, *Literature And The American Tradition*, Doubleday And Company, Inc., 1960
- 11 Randall Stewart, *American Literature And Christian Doctrine*, Louisiana State University Press, 1958
- 12 日高六郎他著、現代アメリカの思想（世界思想教養全集15）、河出書房新社、1962
- 13 日本キリスト教協議会、キリスト教人名辞典、日本キリスト教団出版局、1986
- 14 James D. Hart, *The Oxford Companion To American Literature*(Fifth Edition), Oxford Press, 1983
- 15 キリスト教大事典編集委員会、キリスト教大事典、教文社、1988
- 16 京大西洋史辞典編纂会、西洋史辞典、東京創元社、1990